

A B r i e f N o t e N o . 2 0 5

発行日：2011年1月4日

イギリス の旅 (9月20日～9月28日)

八千代市 松尾 昌泰

1、はじめに

今回、イギリスに旅行してきた。成田からスコットランドのエディンバラに飛び、グレートブリテン島を観光しながら南下して、ロンドンを見学して、成田に帰ってきた。

景色がよく落ち着いたのは、北部の羊の牧場や牧草地のあるスコットランドと、昔から自然を保護している湖水地方とであった。

帰りの飛行機便に間に合わなかったというアクシデントがあり大変だった。

2、イギリスって、どんな国！

通常、イギリスとかUKと言っているが、正式な国名は「グレートブリテン及び北アイルランド連合王国」と長い名前であり、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドから構成されている、立憲君主制国家である。(国の体制は国王を国家元首とし、議院内閣制に基づく立憲君主制である。)

人口は約6000万人(日本の約半数)、国土の面積は日本の2/3程度、付加価値税は17.5%(2011年4月からは20%。なお、一般食料、医薬品、障害者用機器等は無税)。

3、エディンバラ (Edinburgh)

最初に訪れたのは、エディンバラ(スコットランドの首都)である。

エディンバラのシンボルである、エディンバラ城は切り立った岩山の上に建つ要塞である。起源は7世紀頃とのことである。



岩山の上に建つエディンバラ城

現在でも駐留部隊があり、歩哨が城門に立ち、スコットランド王の宝冠を警護している。この城には典型的な大砲がある。その1つは、「モンス・メグ」という巨大な大砲(6トン)で数台が北を向いている。

もう1つは、「ワン・オクロック・ガン」で、文字どおり「午後1時を知らせる銃砲」で、

平日午後 1 時を市民や観光客に知らせたそうです。元々は、フォース湾を航行する船乗り
に時刻を教えるためだったという。



北を向いている数台のモンズ・メグ



ワン・オクロック・ガン

4、湖水地方

エディンバラからバスで南下し湖水地方に着いた。この湖水地方はイギリス最大の国立
公園で、最も美しい風景といわれている。(東西 40km、南北 50km の地域に細長い 17 の
氷河湖や 500 余の沼が点在)

ここは、ナショナルトラストの発祥の地だけあって、さすがに、広大な土地が保護され、
開発されずに「大自然」が残っている。

観光では、湖水地方の最大の湖はウィンダミア湖(南北 17km、東西 2km)に行き、こ
の湖畔のボウネスには多くのホテルが集まり、また湖上遊覧船やフェリーが発着していた。

4-1、遊覧船で (ボウネスから湖の南端のレイクサイドへ)

さて、遊覧船では、船の最先端に先ず陣取った。しかし、風があまりにも冷たかったの
で、最後尾に移動した。湖面は穏やかで船旅は快適だった。40分で終点のレイクサイド
という所に到着した。そこには、蒸気機関車が待っていた。



ウィンダミア湖に浮かぶ遊覧船

4-2、湖水地方を走る蒸気機関車（SL）（レイクサイドからハーバースウエストまで）

急いでプラットフォームの列車の最前まで行ったら、SLが前後逆さに接続されていた。逆さは観光用としては格好悪い。終点のハーバースウエストまでのカタコトカタコトというレールの音や蒸気を噴出す音や汽笛には、懐かしさがあった。右側の景色は山林が迫って崖であり、左側は小さな湖や草原が見えかかれて、まあまあの車窓風景を楽しんだ(20分)。



湖水地方の蒸気機関車

SLは日本の観光地でも見かけるので、そんなに感激はしない。だが、故郷の岡山での通学にSLを使っていたのを思い出した。そのSLはもっと大きく、吐き出す蒸気も汽笛も、もっともって迫力があつた。

5、 ロンドン （人口 750 万人）

湖水地方をさらに南下し、ロンドンに着いた。近代的な建物もあるが、東京のような鉄筋コンクリートのビルばかりではなく、ローマ時代からの歴史的建物も並んでいる。古くからの建物を大切に利用され、落ち着いた感じであつた。

その一方で、不釣り合いな巨大な観覧車がロンドンの中心部に「どかつ」と座っていた。

5-1、バッキンガム宮殿

ツアーでは、宮殿正面広場のヴィクトリア記念碑と、鉄格子の塀越しにバッキンガム宮殿を見るだけであつた。しかし、丁度一般入場している期間だったので、添乗員に予約をしてもらい、入場した。日本語のオーディオガイドが無料で借用できたので、これには助かつた。

この宮殿はエリザベス女王のロンドンの公邸および執務の場であるが、女王が例年 8 月～9 月にかけてスコットランド滞在する期間に限り、宮殿の公式諸間 19 室が一般に公開されている。

公式諸間とは現役で使われる宮殿の中心で、それぞれの部屋には、レンブラントの絵画や、いろんな彫刻、磁器、家具など、王室コレクションからの貴重な美術品に飾られていた。実際に使用されている重要な公式施設が一般公開されていること自身が驚きであつたが、宮殿の維持管理費を補うためとか。

（敷地は約 1 万坪で、舞踏会場、音楽堂、美術館、接見室や図書館等がある。宮殿に勤務する人は約 450 名、年間の招待客は 4 万人。）



ヴィクトリア記念碑とバッキンガム宮殿

5-2、大英博物館（世界最大級の博物館、古今東西の美術品・収蔵品など約 700 万点収蔵）
大英博物館は無料で開放されて、さすが文化・芸術を大切にしている国だと思う。現地ガイドの話によると、入場料を取るほうがコスト高だとのこと。

収蔵品には、世界に植民地を拡大したときの貢ぎ物や、植民地から持ち帰ったものが多く、植民地から独立した国からは、重要な文化財など返還運動もおこっている。

イギリス人の中には「強盗博物館」と言う人もいるそうだが、一方では、一堂に集めたことで研究が進むとか、また、収集することで散逸に多少の歯止めを掛けたとか、だそうである。

確かに、国の遺産であると同時に世界の遺産である。例えば、ギリシャのパルテノン神殿の彫刻は、13世紀に神殿がキリスト教の教会に改装された時点で散逸が始まり、その後もちろんとは保護されては無い。どちらが良かったのだろうか、また、よいのだろうか？

5-3、国会議事堂 / ビッグベン（世界遺産）

正式名はウェストミンスター宮殿。ビッグベン (Big Ben) とは、この宮殿（英国国会議事堂）に付属する時計台の愛称である。

毎日正午に奏でられるビッグベンの鐘のメロディは、4つの音で、日本でお馴染みのチャイム「キンコーンカーンコーン」の基礎となったとされている。



観覧車から見た国会議事堂 / ビッグベン

5-4、テムズ川クルーズ (ロンドン塔から西の国会議事堂までクルーズ)

テムズ川はロンドンの中心部を流れて、船上からは、始点の「タワー・ブリッジ」、ロンドン市庁舎、ロンドンブリッジ、セントポール大聖堂、ミレニアム・ブリッジ、ロンドン・アイ、そして終点近くの国会議事堂(ビッグ・ベン)などを見ることができた。

始点のタワー・ブリッジは、1894年に完成した(120年ほど前)跳ね上げ橋で、昔は1日に何十回も跳ね上げていたけど、今は数回となっているそうだ。(初期は可動部分を蒸気エンジンで開閉したが、現在は電力を利用している。)

日本にも、可動式の勝鬨橋(かちどきばし)が隅田川に架かっているが、残念ながら、現在では可動部への電力供給も無く、可動部はロックされており跳開することはない。



タワー・ブリッジ

クルーズでは、いくつもの橋の下をくぐって進むが、歴史的に名高い「ロンドンブリッジ」は意外にも特徴のない橋だった。この橋の場所には古くから、何度も橋が架けられては倒壊しており、現在の橋は38年ほど前に開通している。

5-5、ロンドン・アイ (巨大観覧車で観光名所、ロンドンの景色には全く馴染まない)

ロンドン・アイ(1999年末に開業。直径135m、カプセル1個当たり定員25人)は世界一だったが、シンガポール・フライヤー(2008年3月開業、直径150m、カプセル1個当たり定員28人)に世界1位の座を奪われている。



ロンドン・アイ



カプセルはホイールの外側に

観覧車に乗る順番待ちの長い列に並んでいたとき、観覧車が一時止まっていた。不思議に思ったが、お年寄りや障害者を乗せる時には、乗降のために止めることが出来るとのことだった。

上の写真をみると、日本で馴染みの観覧車とは何かが違う。それは、カプセルがホイールにぶら下がっているのではなく、ホイールの外側に張り出ている。1周するのに約30分であるが、頂上近くでも四方とも視界は全く妨げられることなく、楽しめた。

(日本で最大は、葛西臨海公園 直径111m 最高部117m 一周17分。かつて日本最大だったスカイドリームフクオカ営業終了。)

6、ローマ帝国の遺跡 2箇所

今回のツアーではローマ帝国の遺跡を2箇所見学した。

1つはハドリアヌスの長城で、400年にわたり、ローマ帝国がイギリスを支配していた時代の遺跡である。イギリスにあるローマ遺跡の中で最大のもので、世界遺産になっている。

もう1つは、ローマ時代に温泉の町として栄えたバースに、紀元前1世紀に建てられたという大浴場ローマン・バスである。

6-1、ハドリアヌスの長城（ローマ帝国の防壁）

ローマ帝国は、1世紀半ばにブリテン島にまで領土を拡大したが、ケルト族の侵略に悩まされた。その頃から10年間掛けて122年に、西海岸から東海岸までの118キロの長城を築いた。

防壁の高さは約4～5メートル、幅約3メートルで、約1.5kmの間隔で監視所が設置され、また、6キロおきに設けられた要塞には、500～1000人の兵士が駐留していたとのことである。

しかし、ローマ帝国の国力衰退で、5世紀頃に放棄され、長城の石の多くは地元の人々に持ち去られ、住宅や囲いや農場などに使用されたようだ。



ハドリアヌスの長城

6-2、ローマ時代の大保養施設ローマン・バス(ローマ浴場博物館)

お風呂の語源となったと云う温泉場バースの町を見学した。なぜ、火山がないイギリスで温泉が出るのか？ それは、火山とは無関係の非火山性温泉だそうで、深く溜った地下水が地球自体の熱で暖められ、地上に噴出しているとのこと。お湯の噴き出し口からは今も1日125万リットルのお湯が沸いていると云う。温泉の水は土色に濁っており、入ることは出来たとしても日本人には受け入れられそうにもない。

らい病で苦しんでいた王様（シェイクスピアの戯曲に出るリア王）が、この温水に浸かり「らい病」が完治したので、この地にバースの町が造られ、侵略してきたローマ人が神殿を建て、浴場を建設したという。



ローマン・バス

7、アクシデント（帰りの飛行機に乗れなかった！）

帰国の日には、飛行機便に十分すぎるほど時間を取って、ホテルから飛行場に向かった。楽しい思い出や、自然の豊かな景色を脳裏につめてである。

しかし、高速道路で大きな交通じこが発生し、3車線とも通行止めになった為、バスは高速道路上で全く動きがとれず、やっと次のインターで一般道に出たが、飛行機には搭乗できな

かった。

飛行機に関する事故の経験は、今まで次のような経験があった。

飛行機に搭乗したが、再度整備の為に数時間待った。

搭乗予定の飛行機の到着が数時間も遅れてしまった。

帰国日に米国での同時多発テロ（9・11）が起こり、米国行き飛行機だけではなく全ての飛行機へのチェックインが送れ、やはり半日近く遅れてしまった。

しかし、今回のように、飛行機の搭乗時間に間に合わなかったアクシデントは初めてだった。

直ぐ次の飛行機に乗ればよいが、実際には成田への直通便は少なく、しかもほぼ満員状態で、直通便は期待すらできなかった。他の飛行場経由でも確保できず、宿泊せざるを得なかった。ガイドは1泊しても確保できないかもしれないとも言う。

翌朝、朝早くから飛行場に行き、旅行業者による席の確保を待った。結果的には、夕方の便でロンドンから香港までは確保できた。私たちは香港まで行き、そこで更に数時間待ち、やっと東京までの搭乗券が手配でき、成田へ帰ってきた。（ツアーの団体客は4便ほどに分かれて帰国した。）

一泊のホテル代金とホテルへの往復交通費、その間の食事代は自己負担だった。確かに、この交通事故は旅行業者の責任ではないが、疑問は残った。

「ほっ」としたが、同時に疲れた。「終わりが悪ければ全て悪しき」ではないが、苦い経験だった。

以上